

# 「カナダの王女」 マルフリースの誕生と 戦時のカナダ社会

田 中 俊 弘

## はじめに

2004年3月24日にオランダのユリアナ王女 (Juliana, 1948～1980年に女王) が逝去すると、その翌週のカナダ下院議会において、自由党のマーリン・キャタレル (Marlene Catterall) 議員(オタワ市ウェスト・ネピアン選出)は、次のスピーチをおこなった。

議長、先週オランダのユリアナ王女が逝去された際にも、今週末の彼女の葬儀の際にも、王女を追悼するオランダの人々の輪に、多くのカナダ人、とりわけオタワ市民が加わりました。

第二次世界大戦中、ユリアナ王女とその家族は、我々と共に暮らしたのです。彼女の娘であるマルフリース王女 (Princess Margriet) は、ここオタワの市民病院の、オランダの地として供された病室でお生まれになったのです。また、ウッド家は、王室家族が暮らすのに好ましい住居を提供するために引っ越すことになりました。

我々はそれ以来、当時の記憶と贈り物と共に暮らしています。1945年の秋に、ユリアナ王女がチューリップの球根 10 万個をオタワに寄贈してくれました。それ以来、チューリップの球根は毎年届き続け、彼女が我々と一緒にいた時の記憶と共に、今ではオタワで 100 万株以上のチューリップが春に咲いているのです。

我々も、彼女を追悼するオランダの人々に加わりましょう<sup>1</sup>。

毎年5月のオタワで開催されるチューリップ・フェスティヴァルの背景となったオランダ王室とカナダとのエピソードは、断片的ながら、色々な媒体に散見されるが、その詳細についてのまとまった記述は、日本はもちろんカナダにおいてすら、ほとんど見つけることができない<sup>2</sup>。それは、戦争遂行努力や国内特定エスニック集団への差別を重視する歴史研究者の視界からは外れたトピックだからであろう。

しかし、「カナダの王女(Canada's Princess)」ともあだ名されたマルフリート誕生をめぐるカナダ政府の対応や当時の社会状況を調べていくと、戦時中のカナダ社会の特徴的な側面が見えてくる。本稿は、いわゆる「正史」ではほとんど触れられないエピソードとその周辺の出来事から、この時代のカナダ社会の一面を指摘しようとする試みである。以下、本論では、戦時のオタワの状況を概観した後、王女誕生に関する動きを具体的に検証した上で、それらの特徴を論じ、いくつかの問題を提示していく。

## 1. 第二次世界大戦中のカナダとユリアナ王女

### (1-1) 総督夫妻とヨーロッパ王室の絆

国王(英国王が兼任)の名代であるカナダ総督だったトゥイーズミュア男爵ジョン・バカン(The Lord Tweedsmuir, John Buchan)が在任中に落馬事故で急死したのを受けて、1940年からは、アスローン伯アレグザンダー・ケンブリッジ(The Earl of Athlone, Alexander Cambridge)がその座についていた。アスローン伯は、トゥイーズミュア男爵が死の床にあった時から、すでにキング首相が次期総督候補として内々に名前を挙げた人物であった<sup>3</sup>。その要請はイギリス側にも受け入れられ、伯爵夫妻は、ドイツ軍潜水艦の攻撃を避けて大変な航海をしながら大西洋を渡り、1940年6月21日から総督公邸リドー・ホールでの執務を開始したのである<sup>4</sup>。

アスローン伯は、英国王ジョージ5世の妃だったメアリ(Mary of Tech)の弟、すなわち英国王ジョージ6世の叔父であり、しかも彼の妻アリス(Princess Alice)はヴィクトリア女王の孫であったため、2人揃ってヨーロッパ王室とのつながりが極めて強かった<sup>5</sup>。小説家や政治家として活躍をした人物ではあったが、王室とのつながりは希薄だった前任のトゥイーズミュア男爵とは対照的

である。

1939年9月に第二次世界大戦が勃発すると、ナチス・ドイツは、破竹の勢いで周辺国を勢力下に収めていった。そんな中、各国の亡命政府が英国のロンドンに作られたが、王室関係者などは、戦火から離れたカナダにいる総督夫妻との血縁を頼って、オタワへと渡ったのである。その中には、ノルウェイのオーラヴ皇太子(Olav, 後の国王オーラヴ 5世)とその妻マッタ皇太子妃(Martha)、ルクセンブルク大公シャルロット(Charlotte)とその夫君フェリックス(Felix)、ユーゴスラヴィア国王ペータル(Peter)、ギリシア国王ゲオルギオス(George)、オーストリアのツィタ皇后(Zita)とその娘たち、そして、オランダのウィルヘルミナ女王(Wilhelmina)、その娘のユリアナ王女(Juliana)と孫のベアトリクス王女(Beatrix)らが含まれていた<sup>6</sup>。ウィルヘルミナ女王は、アリスの従姉妹であった。

植民地時代には、帝国とカナダを結びつける極めて重要な政治的存在だった総督は、1909年のカナダ外務省設立以降、徐々にこの国における権限を縮小させていた。1940年に国会議事堂東棟からリドー・ホールにその執務室が移転になっていたのは、その象徴的な出来事であったし<sup>7</sup>、さらに戦後の1952年には、ヴィンセント・マッシー(Vincent Massey)がカナダ人初の総督になるなど、元来の権能を次々に失っていくのであるが、第二次世界大戦時には、そのような時流の変化に逆らうように、総督公邸が重要な役割を果たしたのだ。つまり、総督夫妻の血縁の絆によって、カナダの首都オタワに、平時では考えられないようなヨーロッパ王室の一種のサロンが形成されたのである。

## (1-2) ユリアナ王女とオタワ

第二次世界大戦を目にした1939年8月、ウィルヘルミナ女王はオランダが厳正中立を守る旨を宣言していたが<sup>8</sup>、翌年5月10日、ナチス・ドイツは、宣戦布告することさえなく、オランダ・ベルギーへの侵攻を開始した。侵攻の前夜、その動きを察知したオランダ王室メンバーは、ロンドンへの脱出準備を始めた<sup>9</sup>。翌朝、すなわち侵攻の日の早朝、彼らは密かに王宮を出ると秘密の隠れ家で3日間を過ごし、その後、イギリスの小型駆逐艦でイングランドに向かったのである。ユリアナ王女の夫ベルンハルト(Bernhard)は、家族と別れて一旦オランダに戻るが、ナチス軍の前に4日後には降伏し、再びロンドンに戻った。その後、イングランドが爆撃の危機に晒されるようにな

ると、ウィルヘルミナ女王とベルンハルト王子の2人は、亡命政府と連携を取るためにロンドンに留まったが、ユリアナ王女とその2人の娘——ベアトリクス(後の女王)とイリーヌ (Irene)——は、オランダの巡洋艦スマトラ号 (The Smatra) で、戦火の及ばないカナダに渡ったのである<sup>10</sup>。駆逐艦一隻のみを同行させて、Uボートの攻撃を避けながら進む航海は、しかし特に大きな問題もなく、6月11日には無事にハリファックス港に到着し、そこから陸路を移動して首都オタワに入り、その後、彼女たちは終戦までをこの街で過ごした。

ユリアナ王女と娘達は、オタワに着いてしばらくはリドー・ホールで過ごした後、まずは、ロックリフ地区ランズダウン通り (Landsdowne Road) の、マッケイ湖 (McKay Lake) の南側の家に暮らした<sup>11</sup>。王女は、少しも尊大ぶらない親しみやすい女性だったようで、彼女自身も、到着後間もない時期のラジオ放送で、「皆さんは私の子供たちが皆さんに混じる様子を目にするでしょう。皆さんは子供たちをしばしば見かけるでしょう。私たちは自分たちの身をどこか隔離された場所におくつもりはないからです。それは私たちの自然な姿ではありません」<sup>12</sup>とカナダ国民に語りかけたし、当時の新聞にも、特別扱いを好まず、オタワの人々と同じ暮らしを望んでいた様子が取り上げられている。彼女は自分で果物や野菜を買い、映画館では他の人と同じように列に並び、値段が安いからという理由でウールワースの店で買い物をしたし、子供も地元の公立小学校に通わせた<sup>13</sup>。また、夫が従軍している他のカナダ人女性たちと同じように、兵士達のために編み物をし、戦争協力の資金稼ぎに中古品販売店 (Superfluity Shop) でボランティアを務めたのである。

カナダのマッケンジー・キング (W. L. M. King) 首相は、初めて会った時から、素晴らしい魅力と美しさを持ち、穏健な常識感覚を有するユリアナ王女に魅了されていた<sup>14</sup>。キング首相の祖父ウィリアム・マッケンジー (William Mackenzie) は、1837年のアッパー・カナダの反乱の中心人物としてカナダ史に名前を残しているが、その祖父がアメリカに避難している時にキングの母親が生まれたこともあって、ナチスに国を追われてカナダで懐妊した王女に対する共感も人一倍であった。「子供が生まれれば、かつて広大な帝国を築いた歴史ある国家の王室継承者になりうる子供が、母親の追放——政治的追放もしくは避難——のさなかに生まれることになり、このような形で『王国の再生』を求める巡り合わせになったこと」は興味深いと、キングは日記に書き留めている<sup>15</sup>。

首相が抱いた敬意や共感は、次節で示す、王女のオタワでの出産に際した迅速な対応にも大いに影響したに違いない。彼は、ユリアナ王女の出産に特別な措置が必要だと聞かされるとすぐに、かつての自分の私設秘書で当時は外務省の儀典長を務めていたハワード・メジャーズ (Howard Measures) にその検討を任せ、しかしそのメジャーズが困惑するほどに、手配の進行状況について、彼に繰り返し問い合わせ続けたのだ<sup>16</sup>。また、1943年の新しい年を、まずは王女への手書きの手紙をしたためて始めていることから、首相が彼女をとてども気にかけていた様子がわかる<sup>17</sup>。王女の出産へのカナダ政府の迅速な対応には、彼女自身の人柄や魅力も影響していたのである。

## 2. ユリアナ王女の出産とマルフリート王女の洗礼

### (2-1) 王位継承権の問題

1942年の春の終りに、ユリアナ王女は、自らオタワ市民病院(現 オタワ病院市民キャンパス)産婦人科のパディコンブ (John F. Puddicombe) 医師に電話をかけ、検診を予約した<sup>18</sup>。まだ公衆には秘密であったが、第3子を宿したのだ。胎児はその後、順調に成長していった。

しかし、王女の出産について、大きな問題が浮上した。その子供がカナダで生まれれば、オランダの王位継承権を失うというのだ。カナダは出生地主義をとっているため、カナダ生まれとなれば、自動的に英国臣民となるが<sup>19</sup>、オランダは二重国籍を認めていなかったためである<sup>20</sup>。そのことを、ユリアナは1942年10月にアスローン伯に相談し、総督はその月の22日に、首相に対応を依頼した。キングの日記には、その時の様子が次のように記されている。

木曜の晩、総督公邸で、1月に出産予定のユリアナ王女が、子供は「オランダの地 (Dutch soil)」で生まれなければならないと心配している旨を、総督閣下が私に話した。男児だとすればオランダ王室の後継者となる人物である。もちろん私は、オランダの公使館でお産の床につくべきだと示唆した。総督もそのことをすでに話したそうだが、この頃の女性は、より安全であるなどの理由から、病院に行くのが賢明だと感じているのだということである。私は、外務省法律顧問のリード (Escot Reid) に話して、ユリアナ王妃がいる時間に(病院の)部屋を公使館にリースするよう手配できる

かどうかを確かめ、そのために法律上の擬制(legal fiction)を実施できるか確かめてみると話した。そして翌日、ロバートソン(〔Norman〕 Robertson, 外務次官)に話をし、彼女は自分の家に居てもらって、そこを公使館にリースした方が良くもしいないと話した。リードが調べてくれる予定である<sup>21</sup>。

オランダの地で産まなければならないという王女の誤解はともかく、王女とカナダ政府がこの問題に気づいたのは、出産予定をわずか3ヶ月後に控えた時期だったが、キングが指摘したように、もしも公使館内で出産すれば、国籍問題が解決できたのだと考えれば、それほど無理難題ではなかったとも言えよう。その後、キング政府は速やかに対応を検討して、公使館でもランズダウン通りの自宅でもなく、担当医のいるオタワ市民病院が、彼女の出産の場に選ばれた。最終的にその判断をしたのは、対応の検討をキングに求められていた法律顧問のリードだったようである<sup>22</sup>。

そして、「オランダ王室—あるいはその成員—が、カナダでの避難生活を続けられるようにし、オランダ王位の推定継承者がお産の床につく場所—それゆえ王位継承者が生まれるかもしれない場所—に領土外(治外法権)の性格を与えるよう手配することが適切であるがゆえに」、「オランダのユリアナ王女がお産の床につくカナダの場所はどこであれ、出産の期間中と、そのような目的で実際に占有している範囲において領土外とされるし、そのような目的から、ユリアナ王女と生まれてくる子供は、連邦であれ州であれ、刑法、民法、軍法から免除されることを認める」とする法律が<sup>23</sup>、枢密院令(Order-in-Council)として発布され、総督と法務副大臣 F・P・ヴァーコー(F. P. Varcoe)の署名を添えた宣言書(Proclamation)が、『カナダ官報(Canada Gazette)』の1942年12月26日号にて公表された<sup>24</sup>。

議会休会中にも内閣主要閣僚から形成される枢密院の委員会によって審議され、総督の承認を受けて成立する枢密院令は、平時にも運用されているが、特に戦時においては、1914年に成立した戦時措置法(War Measures Act)という緊急立法に基づいて、カナダ防衛規制法(Defence of Canada Regulations)が、1939年9月3日に議会を通過しており、同法の下で、議会の意見を聞かずに内閣が国家統治を行なえる領域が広がっていたのである。このユリアナ王女に対する特別な配慮も、宣言書には、「カナダ枢密院の助言により、また1927

年カナダ法改訂法 206 条、戦時措置法によって我々に与えられた権限により」立法化された旨が記されている<sup>25</sup>。

こうして、王女がオランダの国土で第3子を出産する環境が整った。男子であれば王位継承順位が第1位となる子供である。

## (2-2) 王女の出産

1943年1月18日の『オタワ・シティズン(Ottawa Citizen)』紙の夕刊は、例年よりも降雪量が多いオタワで、出産の日に交通が麻痺するような事態になっては困るという理由で、この日、ユリアナ王女がオタワ市民病院に早期入院した記事を掲載している<sup>26</sup>。実際の出産が、その翌日の午後だったことを考えれば、それは決して早すぎた入院ではないが、予定よりも少し早い出産だったのかもしれない。

しかし、18日に入院した本当の理由は、寒波のせいではなく、ユリアナ王女が、長女のベアトリクス王女からおたふく風邪をうつされたためであった<sup>27</sup>。その日、王女はパディコンブ医師に電話をかけ、「今日の先生のユーモアのセンスはいかが？」と軽口の挨拶をした後、自分がおたふく風邪に罹った旨を告げ、それを聞いて合併症などを恐れた医師が、即時の入院を指示したのである<sup>28</sup>。

予め決められていたとおり、彼女の入院によって一時的に「カナダの領土外」となったのは、この病院の3階の3048号室を中心とする4室であった<sup>29</sup>。王女の部屋と、そこからドア続きになっている産まれてくる子供の部屋の他に、オランダから同行していた看護婦の部屋、常時駐在した警備兵の部屋が用意された。カナダ人の2人の看護婦——グラディス・ムーアヘッド(Gladys Moorhead)とジャネット・ジョーンズ(Janet Jones)——は、「入国」に際してセキュリティ・チェックを受けた。担当のパディコンブ医師には、インターンのパイアマン(Harry Fireman)医師が補佐役でついた。その他、出産の公証人となるべく、オランダ大使と大使館員が病室に控えていた。この時既にオタワに来ていたベルンハルト王子は、分娩室の前をうろつきながら出産の時を待った。こうして、一時的に「オランダ領土」のように扱われた領域には、ユリアナ王女の他に少なくとも2人の医師、3人の看護婦、2人の公証人、2人の警備兵がいる状態でその時が訪れた。1943年1月19日午後7時頃、ユリアナ王女の第3子——自らの手で世継ぎの王子を取り上げた

いと強く願ったパディコンブ医師の思いは届かず王女であったが――が、無事にオランダ国籍とオランダの王位継承権を持って誕生したのである。幸運にも、ユリアナ王女のおたふく風邪は、生まれてきた子供に何ら悪い影響を及ぼさなかった。

子供が産まれると、ベルンハルト王子は、すぐにロンドンのウィルヘルミナ王女に電話でそれを伝え、公証人たちは女兒である旨を確認して書類に署名を行なった。そして病室では、オレンジ色のアニスの果実で覆われたラスクが、関係者とスタッフに振る舞われた。

ダウンタウンのシャトー・ローリエ・ホテルでは、オランダ政府の広報官を通じて7時過ぎに記者発表が行なわれ、そこから世界各国に王女誕生のニュースが伝えられた。さらに7時45分には、オタワ市民病院が最初のコミュニケを発表し、女兒の体重が7ポンド12オンスであり、母子ともに健康であることを伝えた。

また、この日モントリオールにいたキング首相には、事前に彼がメジャーズに依頼していたとおり、電話と電報の両方で王女出産の吉報が伝えられたが、首相がそれを聞いたのは、8時頃になってからだった<sup>30</sup>。キングは、先ほどまで話をしていたエレノア・ルーズヴェルト(Eleanor Roosevelt)米大統領夫人の部屋に行つてその話を伝え、「男児でなかったことを残念がる人たちがいるかもしれない」とつけ加えているが、それはキング自身の思いも反映していたはずである<sup>31</sup>。

翌日、オタワの国会議事堂中央のピースタワーの鐘がオランダ国歌などの調べを打ち鳴らし、カナダの歴史上最初にしてこれまでで唯一、外国旗を塔の先端にたなびかせたのである。

ナチスに対する反抗と希望の印としてウィルヘルミナ王女が選び、オランダ人が身につけていたマーガレットの花にちなんで、ベルンハルト王子とユリアナ王女は3人目の王女をマルフリートと命名した<sup>32</sup>。ロンドンからBBC放送を利用して暫定政府の声を占領下のオランダ本国に運んでいたラジオ・オラニエ(Radio Orange)は、懐妊の情報や出産の情報、そして家族が増えたことを喜ぶ王女たちの声などを伝え続けた<sup>33</sup>。こうして、マルフリート王女は、オランダ人の希望の象徴となった。

その後、カナダ軍がオランダ解放に大きな役割を果たしたことと併せて、カナダ政府の粋な計らいは、両国の良好な関係の象徴となり、チューリップ・



フェスティバルと共に語り継がれている。

### (2-3) マルフリート王女の洗礼

ユリアナの第3王女の誕生は、ロンドンにいたウィルヘルミナ女王にカナダ行きを決意させた。女王は前年夏にもアメリカとカナダを訪問していたが、生まれてきたマルフリートに会い、娘と2人の孫たちとも再会を果たすために、再び危険が予想される旅を敢行したのである。

今回も無事にオタワに到着した彼女は、主にユリアナ王女の家で一族団らんの楽しいひと時を過ごした<sup>34</sup>。以前の住まいと同じオタワの高級住宅街ロックリフ地区にあるストーンウェイ・ハウス(Stornaway House)——現在では野党第一党党首公邸として使用されている——が、ユリアナ王女たちの新しい住まいだった。今回の女王の滞在では、ベルンハルト王子の32歳の誕生日である6月29日に挙行されたマルフリート王女のキリスト教洗礼式が最大の行事となった。

洗礼式は、いつもユリアナ王女が礼拝に通っていたオタワ市内の聖アンドリュース長老派教会(St. Andrew's Presbyterian Church)で執り行われた。そこには、オランダ系アメリカ人としてはヴァン・ビューレン(Martin Van Buren)、セオドア・ルーズヴェルト(Theodore Roosevelt)に次ぐ3人目の米国大統領であり、自らの出自に大きな誇りを持っていたフランクリン・ルーズベルト(Franklin Delano Roosevelt)も、教父母(godparents)の1人として招かれた<sup>35</sup>。彼以外にも、カナダ総督アスローン伯や英国王ジョージ5世の妻メアリー皇太后(Queen Mary)、そしてユリアナ王女の随者で亡命中の彼女の話し相手だったマーティン・ローエル(Martine Roel)が教父母を務めた<sup>36</sup>。

オランダ王室メンバーに海外の要人を加え、さらにカナダ政府の高官たちで埋め尽くされた式典は荘厳であった。キング首相は、この時の様子を次のように書き留めている。

式典は非常に印象的でとても美しいものだった。我々が経験した最も心地よい朝の1つであった。(オランダ)王室メンバーが前列に着席した。女王は2人の小さな王女(マルフリートの姉たち)を彼女の左側に座らせた。その横に赤ん坊を抱えたユリアナが、その隣にベルンハルトが来た。女王の反対側(右側)の席には、総督とアリス夫人、ユリアナ王女の住まいの成

員、そして子供の教父母らが並んだ。私には女王のすぐ後の席が与えられた。私の右隣にはオランダ外相ヴァン・クレフェンス(Van Kleffens)が座り、私は女王の秘書官ヴァン・テツツ(Van Tets)の右側だった。オランダ王室の人々の様子は美しい情景だった。皆がとても愛情深い家族のようだった。教会のサービスはオランダ語と英語で行なわれた。

ユリアナ王女は、教会の彼女の席に着く際、私に頷いてみせた。彼女は真の母親——とても健康そうな——に見えた。彼女とベルンハルト王子は素晴らしいペアだった。彼女は緑色のドレスに身を包み、金色のヴェイルのようなものがついた帽子を被っていた。小さな子供(マルフリート)はサービスの間中、とても良い子にしていた。他の王女たちも、落ち着いてとても良い子だった。

サービスの後、参列者の写真がセント・アンドリュース教会の前の階段で撮影された。私は女王の右側に立つよう指示された。写真を撮り終わるとすぐに、女王は私の方を向き、「キングさん、おはようございます」と言って握手をした。彼女の言葉からは真の喜びの感情が伝わってきた。全てがうまくいったことへの喜びである<sup>37</sup>。

この洗礼の儀式を執り行ったウィンフィールド・バーングラーフ(Winfield Baangraaff)博士——オランダ海軍の牧師で米国ニューヨーク州スタテン島改革派教会の牧師——は、ベルンハルト王子とユリアナ王女に対して、大国の代表とオランダ軍と人民の代表がマルフリートを支援している旨を話し、「本当にあなた方は愛情に囲まれており、我々人民の心の中で、あなた方は大きな場所を占めている」と語りかけている<sup>38</sup>。米国大統領をも巻き込んだこの儀式は、オランダ王室にとっても、戦火に苦しむオランダ国民にとっても、重要な支えになったはずである。

### 3. 「カナダの王女」誕生のエピソードから見えてくる戦時カナダ社会

ここまで見てきた、戦争の特殊な状況下で誕生したマルフリート王女をめぐる逸話は、カナダ・オランダ関係史の心温まる物語として知られている。しかし、この出来事をカナダ史の文脈で考えた場合、第二次世界大戦中の、あまり注目されてこなかった側面が見えてくる。本節では、それらの点を論じていく。

### (3-1) 国際的空間としての戦時カナダ

まず、すでに述べたとおり、戦時のオタワがきわめて国際的な空間であった点を強調したい。もちろん、特に20世紀の世紀転換期以降、カナダが多民族国家としての特徴を増しており、すでに国際色豊かな国になっていたことは確かである。また、この戦争におけるカナダの重要な貢献だった英連邦航空訓練計画 (British Commonwealth Air Training Plan) に基づいて、カナダ上空で訓練をするために、1942年以降、英連邦諸国や他国から多くの軍人が各地に駐在したことも、この国の「国際性」を増すのに一役買っていたが<sup>39</sup>、それにしても、王室関係者がそのように多く集まっていたのは、まさに戦時ならではであった。

そして、彼らの社交の中心は、総督公邸であった<sup>40</sup>。その交流の場の多くにキング首相も関わったとはいえ、あくまでも、総督夫妻を中心とした王侯貴族の血縁の連帯だったのである。それは、前任者の急死で突如アスローン伯が総督に就任した偶然の結果だった。王室との特別なつながりを持たなかったトゥイーズミュア男爵が任期末まで総督であり続けていたら、オタワがそのように王室関係者を集めはしなかったであろう。

しかし、アスローン伯に後任の白羽の矢が当たったのは、特にそのような血筋を重視した結果ではなかったに違いない。それは、1926年に総督が首相の議会解散要求を拒絶して「憲法危機」と呼ばれた所謂キング・ビング事件 (King-Byng Affair) 以降、キング政府は総督権限の縮小を明らかに意図してきたからである<sup>41</sup>。

実を言えば、首相を差し置いて、総督が一種の王室外交を展開していることについて、キングは内心穏やかではなかった。例えば、ユーゴスラヴィアのペートル国王が、キング首相とカナダ政府に対して何らの感謝の気持ちも示さず、総督にだけ礼状を書いていたことについて、「我が国で、政府主催の夕食会を含む歓待を受けたあの若者 (ペートル国王) が、首相に対して何ら礼状を書く事もないこと— 国王や総督を支えている国家から彼らがかけ離れてお高く止まっている、それを当然のことと受け取る態度— は腹立たしい」と、首相は憤慨した文章を日記に残している<sup>42</sup>。

さらに、この日の日記には、ウィルヘルミナ女王が訪加を希望している日時について総督から知らされた話が続くが、キングにしてみれば、そうした

王室への対応は、「もっとも混乱を生じるし大変費用がかかる」ので、「こうした全ての作業を当然と受け取られるのは腹立たしい」ことであった<sup>43</sup>。カナダ政府は、国家を総動員し、国民に我慢と苦勞を強いた戦争努力を続ける一方で、それとは全く異なる王室への配慮も求められたのである。

### (3-2) カナダ首相の立ち位置

総督の存在感が際立った時代であるだけに、キング首相の立ち位置は、戦前以上に難しかったのであろう。マルフリート王女の洗礼式で、アスローン総督夫妻やルーズヴェルト大統領が王女や女王と共に座るのを眺めながら、彼に与えられた女王のすぐ後ろの席に座ったのも—キング自身は何ら不満な様子を見せてはいないが—、彼の位置づけを象徴している。カナダでは、総督がホストを務めるべき存在であり、行政の長にすぎないキングは、結局その後ろに控えていたのだ。それは、ケベック会議でのキングの立ち位置を彷彿とさせる。

マルフリート王女の洗礼式から2ヶ月弱しか経たない1943年8月17日から24日に、ドイツの戦後処理を検討する第1回ケベック会議がケベック・シティで開催されたが、この時、キング首相は単なる会場ホストを務めたのみであり、ルーズヴェルト大統領とチャーチル英国首相の話し合いに加わることは認められなかった。英米両国の首脳にしてみれば、1759年に英仏間の七年戦争(北米ではフレンチ・インディアン戦争)に終止符が打たれたアブラハム平原を見渡せる会場で話し合うという象徴的な意味から、ケベックでの会議開催を企画したのであって、カナダを巻き込む意思はなかった<sup>44</sup>。

それでも、カナダで開催をするなら、せめて予備会談にだけでもキング首相を加えてはどうかというチャーチルの提案に対して、ルーズヴェルトは、ブラジル、中国、メキシコなども同様の要求をつきつけてくるおそれがあるから、カナダも参加させたくないし、そのような話になるならバミュダ辺りで開催した方が良くと書いた上で、キングは最も古くからの友人の1人なので、彼は理解してくれるに違いないと回答している<sup>45</sup>。実際にカナダ首相は「友人」からの依頼に応じたのであるが、この時点でのカナダの戦争への貢献度は、大統領が列挙した他の国々よりも大きかったし、そもそも、カナダでの会議開催についての計画が、キング不在で進んでいく様子は、カナダの立場を無視した、いかにも「大国的」な態度に見える。重要な出来事がキ

キングの頭上で飛び交っている状態である。

その時に感じたであろう違和感を、首相は女王の態度にも感じていた。キングは、ヴィクトリア女王と同種の威厳を持つように感じられたウィルヘルミナ女王に対して、畏敬の念を示していたが、空港への出迎えに総督夫妻がいなかったことに落胆した様子 of 女王に違和感を覚えている<sup>46</sup>、今回は完全にプライベートな旅であるため、女王は誰とも会うつもりはないが、ロバートソン外務次官だけは例外としたい旨をテッツ秘書官から伝えられたことも<sup>47</sup>、首相からしてみれば、疎外感を覚えた出来事であったに違いない。

母親とは随分性格の異なる「庶民派」のユリアナ王女は、キング首相との関係も大切に、それゆえに首相の親愛の情も得ていたが<sup>48</sup>、その彼女にしても、生まれてくる子供の国籍という大問題は、まずは総督に相談を持ちかけたのである。それは、総督がカナダにおける戦時王室外交の中心にいたことに他ならず、キングはその影に置かれていたのだ。

### (3-3) 戦時措置法の問題

ユリアナ王女の出産をカナダ領土外での出来事にするための特別な法令が、戦時措置法を援用しながら、議会での審議を経ずに実施された点も注目すべきである。

既に述べたとおり、カナダでは、平時から枢密院令と呼ばれる法律が施行されるが、戦時措置法によって、第二次世界大戦中には、内閣の立法機能が非常に強化されていた。この戦争中に同法の下で枢密院令として施行された法律は、全部で6,414件あったが<sup>49</sup>、ユリアナ王女のための立法もその1つであった。そのような状況だったからこそ、カナダ政府は、急な要請に対応して迅速に法律化できたのである。

王女の出産に対する配慮は、当時のカナダ国民の感情を鑑みても、誰もが納得する当然の対応だったかもしれない。おそらく議会での審議を経たとしても、何ら問題がなかったに違いない。

とはいえ、内閣が立法権限までも掌握する状態は、健全ではない。実を言えば、戦時措置法は、全く別の側面を持つ法律でもあった。詩人であり大学教授でもあった日系人の活動家ロイ・ミキ (Roy Miki) が指摘するように、同法は、たとえその内容が差別主義的な指示であろうと、非民主的であろうと、実際には軍事的な意味でカナダの治安に関係がなかりと、政府のあらゆる

行動を合法化したのである<sup>50</sup>。その上、同法に用いられている用語の定義が甘く、あまりにも頻繁に修正が行なわれたことも大きな問題だった<sup>51</sup>。

人々から言論の自由を奪ったこの法律は、特に日系カナダ人にとっては、自分たちをカナダ西海岸から強制的に内陸へ移住させ、その財産を二足三文で勝手に売り払わせた悪法であり<sup>52</sup>、恐怖と屈辱の代名詞であった。

戦時措置法の下で1939年から施行されたカナダ防衛規制法は、日系人に限らず、多くのカナダ国民に対して様々な規制をかけた。実際、その乱用を危惧した市民団体の要求で、同法の内容は戦後一部緩和されたし、歴史家ジョン・イングリッシュ (John English) は、そのような戦時措置法への反対運動が、1982年憲法に盛り込まれたカナダの人権憲章の萌芽になったと説明しているが<sup>53</sup>、それはつまり、同法がカナダの民主主義を脅かす内容だったという意味である。ユリアナ王女の産出に対する配慮は、戦時という特殊な状況下で、非民主的な法律の振りが好意的な方向に触れたエピソードだった点にも留意する必要があるのだ。

## むすび

本論は、カナダの首都オタワの5月を彩るチューリップの背景にある歴史エピソードを紐解き、そこから戦時カナダの状況についての、いくつかの側面を指摘してきた。

オランダのユリアナ王女の疎開地オタワでの産出と、産まれてきたマルフリート王女の洗礼式は、戦時という特殊状況の中、占領下のオランダをはじめ、連合国の人々の士気を高めて、その結束を演出する目的も兼ねて、カナダ側からも十分な配慮がなされ、世界中に情報発信され続けた出来事であった。洗礼式のために、ウィルヘルミナ女王がわざわざ戦争中の大西洋上空を渡ったのも、アメリカ大統領を教父に加えたのも、そのような演出とみなすことができる。

ともあれ、ユリアナ王女の産出に際して、カナダ政府が迅速に対応した粹な計らいは、陰鬱な戦争史に小さな灯りを照らした心温まるエピソードであるし、それが第二次世界大戦後のカナダとオランダの友好関係の出発点となっているのだ。

その時のカナダ側の対応は、ユリアナ王女の人柄に影響された一面があるのは間違いないが、そもそも彼女がオタワに来たのはカナダ総督夫人との縁

戚関係があったからであるし、そこに、アメリカ大統領がオランダ系だったこと、カナダ首相の母親が避難先で生まれていたことなど、様々な偶然が重なって、マルフリート王女誕生の物語がより色彩豊かになったのである。

しかし、カナダ史の文脈から考えた場合、それが、総督の権限を縮小させようとしたキング政府の取り組みとは逆行しており、英王室とつながる特定個人を中心にした「総督外交」の中で起きた点に留意する必要があるだろう。それはカナダ政府が目指してきた道ではなかった。また、多くのカナダ国民の人権を侵害した戦時措置法が全く違った形で機能したおかげで、ユリアナ王女への厚意が示されたことも、問題を含んでいる。それは、十分な議論を経ずに、政府の主観的な判断に基づいて、大きな強制力を持った法律が——それが当事者に対して好意的なものであれ悪意が込められたものであれ——出されてしまう問題である。

第二次世界大戦について、それが連合国にとっては民主主義を守るための戦いだったはずなのに、実際には、自ら非民主主義的な行動や活動を行っていたという皮肉が、時にマイノリティ研究の視座から指摘されるが、ユリアナ王女の出産をめぐるエピソードも、そうした行動や活動の一面とみなすこともできるのである。

#### <注>

本稿は、テレビ番組制作を手がける(株)ジョイマンの前田あきみつ氏から受けた取材協力の依頼がきっかけとなって作成した。

1. 37th Parliament, 3rd Session, *Edited Hansard*, No. 34, April 1, 2004.
2. 本稿作成にあたって依拠した次の書は、出版当時のカナダ総督だったラモン・ナティシュン(Ramon Hnatyshun)の前文などが添えられており、写真を中心とした構成の薄い1冊ながら、マルフリート王女誕生について、おそらく最も詳細かつ正確な二次文献である。Albert VanderMey, *When Canada Was Home: The Story of Dutch Princess Margriet*, Surrey, Canada: Vanderheide, 1992, 14-15.
3. Library and Archives of Canada [LAC], Mackenzie King Diaries [以下、KD], February 8, 1940.

4. The Governor General of Canada site <<http://www.gg.ca/document.aspx?id=55>> など参照。
5. Ibid.
6. Ibid.
7. 拙稿「総督権限の変遷とカナダの発展：連邦結成から大戦間期へ」『麗澤大学紀要』第74巻、2004年12月、99-124参照。
8. 森田安一編『スイス・ベネルクス史』山川出版社、新版世界各国史14、1998年、329。
9. 以下、脱出の記録については次の新聞記事を参照。“The nurse and the little princess,” *The Global and Mail*, February 11, 2003.
10. VanderMey, *When Canada Was Home*, 14-15.
11. *Ibid.*, 19.
12. *Ibid.*, 17.
13. “Princess Margriet, who arrives today for a three-day visit, might be surprised to learn what her mother, Queen Juliana, did to Benjamin Coopersmith’s produce during the war,” *The Ottawa Citizen*, May 12, 2005 ; “The Gift of Tulips,” National Capital Commission of Canada site <[http://www.canadascapital.gc.ca/bins/ncc\\_web\\_content\\_page.asp?cid=16297-16298-10118-10120&lang=1&bhcp=1](http://www.canadascapital.gc.ca/bins/ncc_web_content_page.asp?cid=16297-16298-10118-10120&lang=1&bhcp=1)> など参照。
14. KD, October 1, 1940.
15. KD, October 25, 1942.
16. Hugh Keenleyside, *Memories of Hugh L. Keenleyside*, vol. 1, *Hammer the Golden Day*, Toronto: McClelland and Stewart, 1981, 448.
17. KD, January 1, 1943.
18. VanderMey, *When Canada Was Home*, 32.
19. カナダ市民権法が施行され、法的な意味での「カナダ国民」が1947年に認められるまで、カナダ国民とはすなわち英国臣民であった。加藤普章「カナダの国籍概念と選挙権：英国臣民からカナダ人へ」『大東法学』第19巻第1号、2009年、特に9-13参照。
20. オタワ市民病院をオランダ領に認めたというのは誤解である。カナダ政府はそこを単に領土外としたに過ぎない。(Wikipediaの“Princess Margriet of the Netherlands”の項にもそのような指摘が見られる。)



21. KD, October 25, 1942.
22. VanderMey, *When Canada Was Home*, p.28.
23. Proclamation<<http://www.cbc.ca/photogallery/news/976/>>;<[http://en.wikisource.org/wiki/Proclamation\\_declaring\\_the\\_extraterritoriality\\_of\\_the\\_birthplace\\_of\\_Princess\\_Margriet\\_of\\_the\\_Netherlands\\_in\\_Canada](http://en.wikisource.org/wiki/Proclamation_declaring_the_extraterritoriality_of_the_birthplace_of_Princess_Margriet_of_the_Netherlands_in_Canada)>.
24. VanderMey, *When Canada Was Home*, 18.
25. Proclamation <<http://www.cbc.ca/photogallery/news/976/>>; <[http://en.wikisource.org/wiki/Proclamation\\_declaring\\_the\\_extraterritoriality\\_of\\_the\\_birthplace\\_of\\_Princess\\_Margriet\\_of\\_the\\_Netherlands\\_in\\_Canada](http://en.wikisource.org/wiki/Proclamation_declaring_the_extraterritoriality_of_the_birthplace_of_Princess_Margriet_of_the_Netherlands_in_Canada)>.
26. *Ottawa Citizen* (The Evening Citizen), January 18, 1943.
27. Elaine Medline, "Nurses remember royal birth in '43 was Dutch treat: With her homeland occupied, Holland's Princess Juliana fled war-torn Europe to have her baby in Canada," *The Vancouver Sun*, May 5, 1997
28. VanderMey, *When Canada Was Home*, 32.
29. 以下、出産時の様子については主に次の文献・資料を参照した。"Dutch princess to present gift in Ottawa," *The Globe and Mail*, May 7, 1979; "Nurses remember royal birth in '43 was Dutch treat" *The Vancouver Sun*, May 5, 1997; "Doctor recalls the day a princess was born in Ottawa," *The Ottawa Citizen*, May 14, 2005; VanderMey, *When Canada Was Home*, 29-33; CBC Digital Archives "Netherlands' Princess Born in Ottawa" <[http://archives.cbc.ca/on\\_this\\_day/01/19/](http://archives.cbc.ca/on_this_day/01/19/)>. 最後のCBC デジタル・アーカイブズに収められた1992年1月23日放送の2分強のクリップは、出産に立ち会ったカナダ人看護婦の証言を中心に構成されており、特に参考になる。なお、4室の他にサニタリーも王女専用スペースとして他の患者が入れないようにされ、ユリアナ王女はそのことを申し訳ないとこぼしていたという。
30. KD, January 19, 1943.
31. Ibid. キングによれば、彼の言葉に対してルーズヴェルト夫人は、このような時には子供を持つことだけでとても幸せなはずだし、ユリアナ王女は間違いなくそう思っているはずだと答えている。
32. VanderMey, *When Canada Was Home*, 26, 40, 42 など参照。
33. Ibid., 40.
34. Ibid., 49.

35. *A Transatlantic Friendship: Addresses by Queen Wilhelmina, Queen Juliana and Queen Beatrix of the Netherlands to the joint sessions of the United States Congress*, Middelburg: Roosevelt Study Center, 1992, 8-9. < <http://www.roosevelt.nl/Content/RSC/ffa%20publications/A%20Transatlantic%20Friendship.pdf> > ルーズヴェルトは、オランダ語はほとんどできなかつたため、女王が、英語が堪能である旨をキング首相から聞いて安堵している。KD, June 25, 1942.
36. The Gift of Tulips,” National Capital Commission of Canada site <[http://www.canadascapital.gc.ca/bins/ncc\\_web\\_content\\_page.asp?cid=16297-16298-10118-10120&lang=1&bhcp=1](http://www.canadascapital.gc.ca/bins/ncc_web_content_page.asp?cid=16297-16298-10118-10120&lang=1&bhcp=1)>
37. KD, June 29, 1943.
38. VanderMey, *When Canada Was Home*, 52-53.
39. J.L. Granatstein & Desmond Morton, *A Nation Forged in Fire: Canadians and the Second World War 1939-1945*, Toronto: Lseter & Orpen Dennys, 1989, 102-108.
40. リドー・ホール以外にも、例えば、ちょうど英国首相だったラムゼイ・マクドナルド(Ramsay MacDonald)の息子マルコム(Malcolm)が高等弁務官(High Commissioner)としてオタワに赴任していたこともあり、その公邸であるアーンスクリフ(Earnscliffe)は、カナダの政治家や知識人に加え、ユリアナ女王らの交流の場となっていた。T.W. Read, "Remembering Sheila Lochhead," *The Ottawa Citizen*, September 7, 1994.
41. 拙稿「総督権限の変遷とカナダの発展」参照。
42. KD, June 25, 1942.
43. Ibid.
44. Roosevelt Papers: Telegram Prime Minister Churchill to President Roosevelt, 16/7/1943, (United States Department of State, Foreign relations of the United States. Conferences at Washington and Quebec, 1943) <<http://digicoll.library.wisc.edu/cgi-bin/FRUS/FRUS-idx?type=article&did=FRUS.FRUS1943.I0010&iid=FRUS.FRUS1943&isize=M>>
45. Ibid., President Roosevelt to Prime Minister Churchill, July 24, 1943.
46. KD, June 18, 1942.
47. KD, June 20, 1942.

48. 例えば、出産間近の1924年のクリスマスに、ユリアナ王女はキング首相に彼の写真が欲しいと頼み、その写真が2人の間の共感の印になると話している。KD, December 24, 1942.
49. Suzan C. Boyd, Dorothy E. Chunn and Robert Menzies eds., *[Ab]Using Power: The Canadian Experience*, Halifax: Fernwood Publishing, 2001, 79.
50. Roy Miki, *Justice in Our Time: The Japanese Canadian Redress Settlement*, Talon Books, 1991, 24.
51. N. F. Dreisziger, "The Rise of a Bureaucracy for Multiculturalism: The Origins of the Nationalities Branch, 1939-1941," Norman Hillmer et al. eds, *On Guard For Thee: War, Ethnicity, and the Canadian State, 1939-1945*, Ottawa: Canadian Committee for the History of the Second World War, 1988, 2-3.
52. J.L. Granatstein and Peter Neary, *The Good Fight: Canadians and World War II*, Toronto: Copp Clark Ltd., 1995, 10.
53. John English, "Defence of Canada Regulations," <<http://www.jrank.org/history/pages/7085/Defence-Canada-Regulations.html>>